

第二 1907年「癩予防二関スル件」

熊野の靈泉から医術へ

説経節『しんとく丸』では、しんとく丸は観音のお告げに従って、中世から「癩」治療の場として名を馳せた、熊野の靈泉に向かう。ところが浄瑠璃『弱法師』では、観音のお告げも靈泉の話も一切登場しなくなる。そのかわりに俊徳丸は父の館を出た後、家臣の家族の献身によって、貧しい生活の中で高価な薬を服用している。だからこそ「いじゆつ（医術）をろかはなけれ共、さらにくはいき（快気）もえ給うはず」という嘆きも生まれる。

ただし、浄瑠璃『弱法師』は、天王寺における善光寺の出開帳に合わせて書かれた作品であったため、最終的には俊徳丸の「癩」は、善光寺の印文で治るといふ御利益譚になっている。

4) 『莠伶人吾妻雛形』

業病観の展開と業をさらす意識

1733年の『莠伶人吾妻雛形』から、「業病」という言葉が登場する。

一連の作品の中で使われている、しんとく丸の病気の呼称を列記すると、以下のようになる。

作品名	病気の名称
謡曲『弱法師』	「盲目」
正保版『しんとく丸』	「人のきらひし違例」「人のきらひし三病者」「人のきらひし病者」
江戸版『しんとく丸』	「三千人のきらしいれい」「あしきいれい」「人のきらしいれい」 「やまふ」
浄瑠璃『弱法師』	「あしきらいさう」「人のきたなむるれい」
『莠伶人吾妻雛形』	「異病」「癩病」「天刑の病」「業病」
『摂州合邦辻』	「三病」「悪病」「癩病」「癩疾」「業病」「癩病人」

説経節『しんとく丸』までは、「癩」は「いれい」「やまふ」という、一般的な病気を意味する言葉に、「人のきらひし」などの言葉をつけて、「癩」であることを限定して示す。17世紀末の『弱法師』にいたって初めて、「らいさう」（癩瘡）という病名が登場する。

18世紀の『莠伶人吾妻雛形』と『摂州合邦辻』で、「業病」「天刑」という、業罰観を明確に示す呼称が使われるようになるのは、庶民の「癩」への差別意識が、外見に対する「きらひ」「きたなむ」という、従来の感情的なレベルだけでなく、「癩」者が犯したであろう、前世や現世での罪障に対する非難をも、強く伴うようになったことの反映と考えられる。

『莠伶人吾妻雛形』は、俊徳丸の病の罪深さを、陰陽師が次のように表現する。

「癩病をやむ人ハ、仏千神千体人間千人、合せて三千の仏神人にくまれたる業人と申せば、神仏を祈しとて其しるし有べからず、つくづくと存るに、此御病気をなをさんにハ、いたハしながら若君を人だち多き所にすておき、諸人に御顔見せ申さば、恨をふくミ毒をあたへし者迄